

# 栽培豆花

# 山桜の里 戸赤



今年は播種した豆が  
腐食することもあった

# 大つぶ実る 良い年で

# ありますように

**花豆の定植**  
地元特産の花豆は五月二十日ごろ定植されました。ポット苗の芽出し具合や畝間、株間の間隔など、栽培者同士情報を交換しながら作業を進めています。



遅霜を心配していつ定植するかが難しい



今までの経験から株間を思い切って広げた

# 山桜の盛り

山桜の盛りは五月二、三、四日ごろだったことし、やはりイベント三日間を開花最盛日に合わせることは難しく、九日の連休前半は肌寒く連休後半になってからいい花を見ることができました。この間の来訪客は千五百人と推計されます。

年間通じて外来者との接点を持ちながら、地域活性化につながる方法を考えていきたいと思っております。今年には日大ジャズ研究会との連携がうまれ、季節



凍み大根、花豆パイなど物販はお客様に喜ばれる



手打ちそばは一番人気



まつり前日に仕込みの準備



イベント初日の4月27日季節外れの降雪、サクラの花芽も素直には咲けなかったのかもしれない



日大ジャズ研究会が応援出演

感を生かした交流など継続的な活動に向けた協議を始めることになっています。

【木地の学習No.31】第2回目は寛政七(1795)年であるが、氏子狝帳が残されていないので氏子狝をしたものかどうかは分からないが、次の文書によって金龍寺の住僧興宗が来たことは確かである。①「此度木地挽住居之山々巡回ニ付分明ニ相知候間…」②寛政七年の「宗旨讀印證」を七点ほど確認している。今までの氏子狝帳には木地小屋巡回の漏れがあったが、この寛政七年の文書の木地小屋巡回は、ほぼすべての木地小屋を回って宗旨讀印證を発行している。次回の寛政十二(1800)年の君ヶ畑氏子狝帳二九号簿冊には、寛政七年の木地小屋をなぞるようして巡回しているのが分かる。もれなく巡回するようになるこの時期が、根元地が会津木地小屋に対して確固とした支配権を有した時であるとみなしてもよいのではなかろうか。享和三(1803)年も金龍時による回国と思われるが、この年の「宗旨讀印證」は見つかっていない。しかし、「是迄寛政七卯年、享和三亥年近頃者文政十亥年」に会津に来て、人別攻めを済ませたという文書がある。文政十(1827)年には、蛭谷と君ヶ畑が共に会津での氏子狝をしている。(会津地方歴史民俗資料館「木地語り」より) <つづく>



# 大型連休、後半に花

福島県南会津郡 下郷町戸赤

やまざくらまつり4日前の新聞折り込みチラシ

「幽玄「戸赤の山桜」下郷  
下郷町西部の戸赤地帯が、見事な花をつけて、見  
区の名物戸赤の山桜一帯となった大型連休

大勢の人が見物に訪れ  
た戸赤の山桜  
中、大勢の見物客が訪  
れた。  
薄紅色のオオヤマザ  
クラや白いカスミササ  
クラなどが山の斜面を染  
めつけた。  
県内外から大勢の人  
が足を運び、戸赤川の  
流れや田圃とともに幻  
想的な景色を楽しんで  
いた。  
自然が作り上げた美  
しさを写真に収めよう  
と、大勢のカメラマン  
が熱心にシャッターを  
切っていた。

(上)5月8日福島民報

可憐に咲くカタクリ堪能  
下郷 桑取火地区で祭り  
第九回かたくり祭り  
は三、四の両日、下郷  
町の桑取火地区で開か  
れた。地域住民によるか  
たくりの里桑取火実行委  
員会の主催で、カタク  
リの花が咲き始める時  
期に毎年実施してい  
る。会場には特設ア  
ンテナが設けられ、よもぎ  
餅や餅代、舌たんが  
振舞われた。

同地区では約一週に  
わたってカタクリが群  
生しており、遅咲きの  
場所では五月中旬ごろま  
で楽しめるという。

見頃を迎えた桑取火のカタクリ

(上)5月8日福島民報

「長寿の水」  
広場で春祭り  
下郷  
「長寿の水」  
下郷町  
の五の両日、下郷町  
桑取火地区の長寿の水  
村広場で開かれた。  
グリーンサールと  
地元桑取火の協力で毎  
年開催している。開場  
では郷土舞のしんぞう  
のほかに、農産物など  
が販売された。埼玉縣  
の歌手木村太郎さんが  
フロアの歌を披露し  
た。懇話会が水を使  
った。

「長寿の水」  
広場で春祭り  
下郷  
「長寿の水」  
下郷町  
の五の両日、下郷町  
桑取火地区の長寿の水  
村広場で開かれた。  
グリーンサールと  
地元桑取火の協力で毎  
年開催している。開場  
では郷土舞のしんぞう  
のほかに、農産物など  
が販売された。埼玉縣  
の歌手木村太郎さんが  
フロアの歌を披露し  
た。懇話会が水を使  
った。

連休中の  
王の道ホットコ  
ム  
話題

(上)5月12日福島民報

カタクリ祭 来場者を魅了  
下郷で美しい花  
散策しながら見ごろを迎  
えたカタクリの花を愛しむ  
第九回かたくり祭は3、4  
の両日、下郷町の「かたくり  
の里・桑取火」で開かれ、  
美しく咲くカタクリが来場  
者を魅了した。関係者によ  
るとカタクリの花は今月中  
旬まで見ることができると  
いう。

かたくりの里桑取火実行  
委員会の主催。同里はカタ  
クリの群生地を巡る遊歩道  
物などを買い求めていた。

県内外から訪れた来場者  
らが遊歩道を散策しながら、  
遊歩道周辺に咲かれない  
咲くカタクリの花を愛し  
ていた。また会場には、よ  
もぎ餅や地元産物の販  
売コーナーなども設けら  
れ、来場者らが新鮮な農産  
物などを買い求めていた。

下郷町の「かたくりの  
里・桑取火」にかれん  
に咲くカタクリの花

(右)5月8日福島民報

(ストーリー性のある村づくりのために[No.2]・紅梅御前)王は個の途中、奈良路より近江信楽→東海道→甲斐→信濃、そして上州沼田を経て会津に入られたが、檜枝岐から奥会津を通り、七月十六日山本村にお着きになり戸右衛門宅にお泊りになった。そして翌十七日、里人らの案内で越後路を目指して高峰峠まで出立された。平家方の柳津の住人石川有光はこれを知って、栃沢の方より多数で高峰峠に押し寄せた。するとそのとき、一天にわかにかき曇り、雷鳴は轟き雹は氷玉となって石川の軍勢の頭から叩きつけた。以仁王もまた予期せぬ暴風雨のため前進することもならず、止むなく山本村に引き返されたが、王の一行には雹の害はなかった。そして天候の回復するまで二日間山本村に泊まったが、この間に王は、『高峰の風吹き戻す山本に心とどめしみちしるべして』との歌をお詠みになり戸右衛門宅に下し置かれた。このとき同時に『大内』という村名も賜り、山本村を大内村と改称、高峰峠も氷玉峠と呼ぶようになった。

(「会津の歴史伝説」とっておきの33話―小島一男著) (発行所歴史春秋出版株式会社) 出典 (続く)